

## 719 左付属器から子宮体部の巨大腫瘍の1例

武田 麻衣子、笠井 孝彦、榎本 泰典  
高野 将人、森田 剛平、野々村 昭孝  
奈良県立医科大学病理診断学講座

[症例] 60歳代後半、女性

[主訴] 下腹部痛

[既往歴] 特記すべきことなし

[現病歴]

2年前の検診にて子宮筋腫を指摘されたが、1年前の検診では特に大きさ等に変化はなかった。3ヶ月前から左下腹部痛が出現し近医内科を受診したが、便秘症による痛みを疑われた。以後も症状が持続し2ヶ月前に近医産婦人科を受診したところ、ダグラス窩に巨大腫瘍を指摘された。また内膜擦過細胞診にても肉腫が疑われたため、精査加療目的で当院産婦人科に紹介受診となった。

MRIにて、骨盤内に約18cm大の広範に水腫状変化を呈する腫瘍を認め、子宮の変性漿膜下筋腫や肉腫、卵巣悪性腫瘍が疑われた。

腫瘍摘出及び単純子宮摘出術、両側付属器切除術が施行された。

[検査所見]

血液腫瘍マーカーはAFPが7.4 ng/ml (基準値: 1~6.1)と軽度上昇を認めるも、その他CEA, CA19-9, CA125, SCCなどは正常範囲であった。

[腫瘍の肉眼所見]

左付属器から子宮後面に及ぶ嚢胞状変化を伴う巨大腫瘍で、充実性部分では断面は白色〜灰白色調で出血や壊死を伴っていた。その他子宮には数mm〜2.5cm大の筋腫様結節が数個見られた。(肉眼像#1, 2)

[配布標本] 手術切除標本 (子宮体部)

[問題点] 病理組織診断

肉眼像#1



肉眼像#2

